

クリ超低樹高密植並木植栽培は、株間2～3m程度の栽植間隔が適正

[要約]

クリ超低樹高密植並木植栽培の若木期（樹齢10年以内）において、列間が4mの場合、株間2mと3mでは、同等の収量並びに果実重を得られる。樹冠内部の相対照度は、株間3mが2mより高い。

茨城県農業総合センター園芸研究所

成果区分

技術情報

1. 背景・ねらい

クリ超低樹高密植並木植栽培（以下、超低樹高栽培）では、適正な栽植間隔が明らかとなっていない。

そこで、超低樹高栽培における栽植間隔と収量および果実品質等の関係を検討し、適正な栽植間隔を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 超低樹高栽培の株間2mと3mでは、同等の収量を得られる（図1）。
- 2) 超低樹高栽培の株間2mと3mでは、同等の果実重を得られる（図2）。
- 3) 超低樹高栽培の株間2mと3mでは、結果母枝長および基部径等の生育が同等である（表1）。
- 4) 樹冠内の相対照度は、株間3mが株間2mより高い（表1）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 超低樹高栽培は、脚立を使用せずにせん定などの作業ができる。
- 2) 超低樹高栽培は、「筑波」「丹沢」に適用できる。
- 3) 樹冠内を明るくする方法としては、岐阜県方式超低樹高栽培で行われている夏季せん定も有効と考えられる。夏季せん定は、7月中旬頃に次年度使用予定の2倍量の発育枝を残し、他の発育枝は欠き取る。

4. 具体的データ

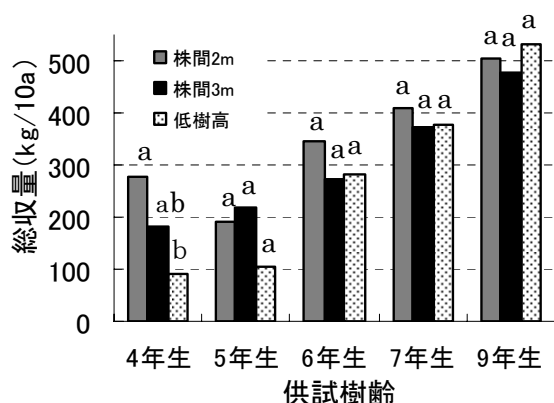


図1 超低樹高密植並木植栽培における栽植間隔の違いが収量に及ぼす影響

注) 多重比較は、異符号間に有意差あり (Tukey 検定 P<0.05)

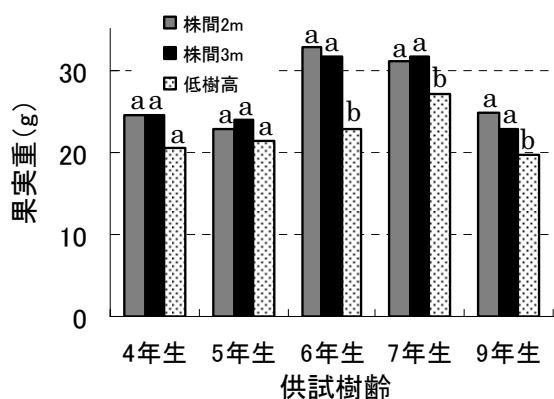


図2 超低樹高密植並木植栽培における栽植間隔の違いが果実重に及ぼす影響

注) 多重比較は、異符号間に有意差あり (Tukey 検定 P<0.05)

表1 超低樹高密植並木植栽培における栽植間隔の違いが生育等に及ぼす影響

栽培方法	結果母枝数 (本/m ²)	結果母枝長 (cm)	結果母枝 基部径 (mm)	樹冠内相対 照度 (%)
株間 2m	3.8 a	84.7 a	9.6 a	20.0 c
株間 3m	3.9 a	81.3 a	9.3 a	38.1 b
低樹高	4.5 a	48.2 b	7.3 b	51.5 a

注1) 数値は、樹齡6～9年生の平均値 (樹冠内日照透過率除く)

注2) 多重比較は、異符号間に有意差あり (Tukey 検定 P<0.05)

注3) 樹冠内相対照度は、地上10cm樹冠内照度/全天照度×100から算出

- 栽培概要：供試樹は「筑波」である。超低樹高密植並木植栽培は、列間4m・株間2mで10a当たり125本栽植、列間4m・株間3mで10a当たり84本栽植した。低樹高栽培は列間4.5m・株間4.5m正方形で10aあたり48本を栽植した。樹冠内相対照度は、平成20年10月6日曇天時に樹冠内の10箇所を測定した。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

クリ超低樹高密植並木植栽培のマニュアル化・平成12～20年度・果樹研究室